

鋭い眼差しが抉り出す再生のきっかけ

—フラナリー・オコナー「善き田舎者」—

中村 恭子

はじめに

フラナリー・オコナーは、作品を登場人物の表情、特に眼差しに力点を置いて描く作家である。カトリック作家を自称する彼女は、エッセイ「教会と作家」の中で、カトリック教徒にとって「目の根ははるかに深く神秘の深みにまで伸びる」(they [the roots of the eyes] stretch far and away into those depth of mystery) と述べている¹。彼女は、目は深遠なる神秘へとつながる通路の入り口として重要な器官であると見なしているのだ。この視点は、1955年に発表した「善き田舎者」“Good Country People”²においても一貫して見られる。本作品の登場人物の目が、神秘の始動に重要な役割を担っている。主人公ハルガは、他人の鋭い眼差しに内面を抉り出されて、精神的な盲目状態から開眼するかのような体験をする。偶然訪れた青年が彼女を見る眼差しに、彼女を開眼へ導く糸口が潜んでいた。この糸口を彼女自身の目で見つけ出したときに初めて、彼女はこれまでにはなかった新たな感覚と視点で対象を見始めるのだ。しかし、オコナーは、この体験を契機にしたハルガのその後の人生については描かずに筆を擱いている。また、彼女は、ハルガに再生のきっかけを与えたであろう青年が、実は悪人であったという結末をも用意している。これらから、本作品におけるオコナーの視点を探りなおすと、二つのポイントが浮かび上がる。まず、目は再生への入り口となる重要な可能性を秘めているということ。そして、その目が捉えたものが、たとえ悪人の眼差しであっても、その悪意が再生の瞬間的始動のきっかけとなりえる、神秘的な可能性を秘めているということである。

本論では、ハルガのなかで再生の神秘が動き出したとみなされる、奇跡的な瞬間に至る経緯を、特に二人の登場人物、聖書売りの青年マンリー・ポインターと使用人ミセス・フリーマンの眼差しに焦点を絞って考察する。

1. 見るべきものは何も無い

ハルガは、彼女の周囲にいる、いわゆる「善き田舎者」たちとは異なる存在として登場する³。32歳になる彼女は、哲学博士号を取得しているが、心臓が弱く、医者からは45歳までの命だと宣告されている。また、10歳の頃に狩猟中の事故で片足を失い、長年義足を使っている。いまは田舎で農場を経営する母親と二人で暮らしながら、毎日朝から晩まで読書をして過ごしている。母親ミセス・ホープウェルは礼儀正しく、つねに微笑を顔に浮かべている。対照的に、娘ハルガは

終始不機嫌で、怒りの表情を絶やさない。大柄で、粗野で、目つきが悪い。彼女は視力が弱く、大きな眼鏡をかけている。その眼鏡の奥の目は「氷のように青い」“icy blue” (273)。そして、彼女の顔つきは「自らの意志でもって盲目になり、なおも盲目のままにしようと決意した」“the look of someone who has achieved blindness by an act of will and means to keep it.” (273) ように見え、「近くをじっと見つめることもほとんどない」“...stare just a little to the side of her” (273)。彼女の「氷のような目」には、冷淡で、血の通った感情を自らの意志で殺している様子が表れている。そして、盲目のままにしようと決意したような、表情の消えた顔つきからは、この世には見るべきものは何も無いのだという、彼女なりの虚無的な結論に達していることが明らかである。彼女は、私たちはみな地獄に落ちているが、「私たちの中には、目を覆う布を取り去っても、見るべきものは何も無いということを見極めた人もいる」“some of us have taken off our blindfolds and see there's nothing to see.” (288) と言い、それはある種の「救い」“salvation” (288) であると考えている。自分は見極めた人間のうちの一人であり、この世は空虚であることを知っていると言っている。そして、何も無い世界には、信じるべき神もまた不在だと、無神論者を自称する。しかし、彼女の周囲の「善き田舎者」たちは、このことを認識せず、表層的な世界に脳天気になつていて彼女の目には映る。この現実が彼女をいらつかせると同時に、彼らを劣っている者として見下させる。そして、彼女を孤立させ、心を頑なにさせるのだ。

2. 母親を蔑視

ハルガの激しい怒りは、なによりも母親ミス・ホープウェルに向けられている。母親は娘が「人並み」の人間ではないことを哀れんでいる。彼女は娘を「ジョイ」“Joy”と命名した。だが、「喜び」“Joy”に満ちた人生を送ることを願う心とは裏腹に、娘は女として「いわゆる人並みの楽しい時」“any normal good times” (274) を過ごすことも無いまま、30歳を過ぎてしまった。若いのに、未だに異性とダンスを踊ったこともないのかと気の毒に思っている。しかし、哲学者である娘ジョイ（ハルガ）には、母親が思い描く喜びの具体例など、低俗で無意味なものではない。ジョイは、21歳のときに法律上の手続きを踏んで、勝手に名前をジョイからハルガに変えた。彼女は、純粋に音の汚さから選んだ名前を、「最高の創造行為」“her highest creative act” (275) と考える。また、何者でもなく自分で自分をハルガに変えたことが、もっとも大きな勝利であると悦に入る。この世に見るべきものは何も無いと虚無感を抱くハルガにとって、人生に喜びなど見出せないのだ。ジョイという名は、自身の信念に背いていた。さらに、希望を抱いて娘にこの名前をつけた母親への反発と当てつけが、彼女を改名へと駆り立てた。彼女は、母親がわが子の肉体を「ジョイ」、つまり喜びに変えることができなかったことを、母親に対する勝利と見ている。娘が五体満足ではないことと、母親を裏切り、己の意志により改名したという事実。この暗い現実を、楽観主義の母親に見せつけ、敗北感を味わせることが、ハルガの唯一の喜びとなっている。だが、当の母親は、「ばかでっかい戦艦の船体」“the broad blank hull of a battle ship” (274) を思わせる「ハルガ」という醜い音で構成された名で娘を呼ぶことはけっして無い。あいかわらずジョイと呼ぶ。なかなかハルガの思惑通りにならない。

母親ミス・ホープウェル (Mrs. Hopewell)⁴ はその名の通り、すべての物事を明るい希望

をもって見る。彼女は夫と離婚し、女手ひとつで農場を切り盛りし、娘を育て上げた⁵。彼女のこれまでの人生は「人並み」の幸せなものではなかった。その彼女が気に入っている処世訓が3つある。「完全なものは何も無い」「Nothing is perfect」(272)、「それが人生だ」「that is life!」(273)、そして「他の人にもその人なりの意見がある」「well, other people have their opinions too」(273)。これらは、彼女の楽観的な人生観の表れである。同時に、思考を停止し、物事や他人の本質を見抜くことをしない、彼女の慣例化した洞察力のなさが読み取れる。その弱い眼力に強烈に訴えるために、ハルガは母親の目から見て極端に粗野で不可解な言動をする。彼女は薄汚れた服を好んで着る。わざと大きな音を立てて歩く。食事の最中に食べ物を口にいられたまま突然立ちあがり、前置きも無く母親に向かって「女よ！おまえは自分の内面を見たことがあるのか？」“Woman! Do you ever look inside?” (276)と叫ぶと椅子に沈みこみ、黙りこむ。哲学などは、母親から見れば古代ギリシャかローマ時代に既に終わったものであり、実用性の無い死んだ学問を、娘は今なお好んで勉強しているとは。読む本といえば、母親が悪寒におそわれたような気分になるものばかりだ。これらの不可解な行動を、母親は、すべて義足のせいであり、娘は今もあどけない子供のままなのだとな得する。そして、体は健全ではないが、器量はそれほど悪くはないのだと自分に言い聞かせ、娘が世間並みの喜びを体験する機会はまだあるのだとわずかな期待を抱く。彼女は、世間から外れた変わった娘を、必死にその枠に当てはめようとする。このような浅薄な望みは幻想にすぎず、ハルガの目には無意味で虚しいと映る。その不毛の虚しさは、ハルガにとって現実の暗い側面を見ず、明るい側面にのみ安住している母親への怒りへと変わる。そして、自己満足に浸る母親を傲慢に蔑視することで、自身を格上げしている。

ホープウェル親子は、互いに目をあわせることをしない。母親は朝食のために台所に下りてきた娘を面と向かって見ない。彼女は娘の様子を「(使用人の) ミセス・フリーマンを隔てて遠まわしに凝視する」“a kind of indirect gaze divided between her and Mrs. Freeman” (275)。不機嫌な娘の様子を気かけながらも、直接凝視したならば、彼女に訳も分からず噛み付かれる恐れがあるのだ。このため、母親は娘とつねに一定の距離を置いている。そして、娘は母親の詮索する視線を直接見返すのではなく、体で感じるだけだ。彼女は母親の動きを目で追うことはなく、気配で感じ取るのだ。このような描写は、母親の紋切り型のように繰り返される日常の所作など、十分に知り尽くしているのだから見るに値しないと見なす、ハルガの心情を表わしている。

3. ただし例外的に聖書売りの青年を注目

ハルガは母親の動きをよく見ないだけでなく、「よく注意して周囲を見ることがほとんどなかった」“she seldom paid any close attention to her surroundings” (287)。それにもかかわらず注目したのが、聖書売りの青年だった。彼は、一見したところ素朴で善良そうなセールスマンであった。

背が高くやせた青年は、ホープウェル家に聖書を売りにきた。マンリー・ポインターと名乗る19歳の青年は、表情豊かに、陽気な口調で話し、愉快そうに笑う。昼食の準備をしていたミセス・ホープウェルは、気はすすまないが、客をぞんざいに扱うこともできず、礼儀正しく彼を家の中に招き入れた。彼は「本当に素朴」“I'm real simple” (278)で「ただの田舎の青年」“I'm just

a country boy” (278) であると自己紹介する。ミセス・ホープウェルは、「善き田舎者」を自称する青年が、じつは娘ハルガと同じく、心臓に故障があり、長く生きられないのだと、彼女をじっと見つめながら告白したことに心を動かされる。そして、その弾みで昼食に招待したのだ。

ハルガとポインターが初めて顔を合わせたのは、母親と3人で昼食のテーブルを共に囲んだときである。そのとき、ハルガは席につきながら青年を一瞥したが、二度と食事中に彼に目を向けることはなかった。また、彼に言葉をかけられても聞こえないふりをした。このような娘の客に対する無礼さを穴埋めするため、母親は普段以上に愛想よくもてなす。しかし、驚くべきことに、娘が彼のナイフとフォークの使い方を「横目で観察している」“observing sidewise” (280) のを、彼女の母親は見逃さなかった。ハルガは青年に興味を抱いている。彼女は彼が語る退屈な身の上話を聞き、青年は率直で純粋な「善き田舎者」であるのか、彼の振る舞いから確認しようとする。また青年のほうも、ハルガの注意をひくような、好意を含んだ鋭い視線を頻繁にむける。この視線を気配で感じ取ったのか、食後、ハルガは、帰路につくため戸口を出た青年と初めて言葉を交わす。その二人の様子を、母親は遠くから眺める。娘の無作法さを思うと、いたたまれなかったのだ。だが、驚くことに、二人の身振りからは会話が弾んでいることが読み取れた。さらに、二人は一緒に家の門にむかって、連れ立って歩き出した。このとき、青年がハルガにかけた第一声は「卵から孵って二日目の雛を食べたことがある？」“You ever ate a chicken that was two days old?” (289) であった。この突拍子の無い、無意味な問いかけを、ハルガは哲学的な問答であるかのような深刻さで受けとめた。そして、「ええ」と重々しく答えると、青年は顔を紅潮させて笑い転げた。ハルガは、表面上尋常ではないこの会話が、この聖書売りの青年が気づかないような深い意味があったのだと回顧する。

ハルガにとって、青年が自分を見つめる「ギラギラと熱を帯びた、非常に小さな茶色の目」“his eyes were very small and brown, glittering feverishly” (284) に注目する。彼は、「好奇心を顕わにし、子供が動物園で新しい珍しい動物を見るように夢中になって」“with open curiosity, with fascination, like a child watching a new fantastic animal at the zoo” (283)、彼女をじっと見ている。ハルガは、この視線には自分に対する好意が含まれていると確信する。そして、好意を逆にとり、母親と同じような「善き田舎者」である聖書売りの青年に、本当の現実を知らしめ、落胆させようと目論む。その目的達成のための手段として、ハルガは純朴な青年を性的行為に誘惑しようと企てる。彼女は、善良な彼が誘惑に屈し、後悔することを次のように想像する。

真の天才は、劣った知能に対しても思想を伝えることができる。彼女は、彼の悔恨の情を自分が引き受け、人生をよりいっそう理解させることを思い描いた。相手の恥を払拭し、それをなにか有用なものに変えてやるのだ。

“True genius can get an idea across even to an inferior mind. She imagined that she took his remorse in hand and changed it into a deeper understanding of life. She took all his shame away and turned it into something useful. (284)

この引用には、「真の天才」と自負し、相手に恥をかかせ、すべてをさらけ出させた上で、人

生の真の意味を教えたいとするハルガの傲慢な態度が表れている。誘惑に屈する人間の弱さや欲深さを、素朴な青年に知らしめる。そして、彼が現実に対して抱く、楽観的な幻想を打ち砕く。このようにして、ハルガは彼に真の人生について理解させるという希望を見出す。それが叶ったときには、彼女は充足感を得るはずだ。

ハルガは、この企てを実行に移す。初めて会った日の夜、人目につかない干し草小屋へ、彼を連れて行く。誘惑の途中までは、彼女の思い通りにことが運んでいるようだった。二人で小屋を目指すが、青年は彼女を抱き寄せ、キスをした。そのとき、彼女の明晰で客観的な脳の働きは、距離を置いて、青年を見て、おもしろがっていた。同時に、自分の思惑に乗ってきた青年に哀れみも感じている。目的地に着くまで、彼のハルガを見る表情は変わらず、ハルガにあこがれを抱く青年と、その彼を蔑むハルガという上下関係は維持されていた。しかし、見世物を嬉々として見入るような彼の目が、急激に変化する。

4. 聖書売りの青年の眼差し

聖書売りの青年の小さな目から、ハルガを「貫き通す」“penetrating” (288) ような眼差しが発射する。その目は、彼女のストラックスの下に隠された義足を見抜く。納屋の二階に上がった青年は、彼女の義足が足につながっているところを見たいと切望する。つねに意志の力でもって表情を変えず、鉄のような面の皮をしたハルガが、この義足を見たがる目に、動揺を隠せず、顔から血の気がひく。彼女は、子供の頃に恥という感情を取り去ってしまったため、今では羞恥心は無くなっていった。しかし、義足に関しては例外である。彼女を覆う、強い意志で厚く固めた仮面にも隙間はあるのだ。

ところで、青年と同じように、彼女の義足に興味を示す人物が、使用人のミセス・フリーマンである。彼女は、4年前からホープウェル家に雇われている。勤勉な田舎女ではあるが、おしゃべりで、何事にも首を突っ込みたがり、名前の通り自由に強固に自分の意見を押し通す。いつも不機嫌な顔をしていて、何事にも動じない。どんな侮辱も気にならない。ハルガは当初、厚顔な彼女を疎ましく思っていた。だが、彼女のおかげで、母親と一緒に農作業や家事をするわずらわしさから解放されたので、彼女を大目にみることにした。しかし、彼女は、ミセス・フリーマンが時々見せる「ビーズのように小さく、鋼鉄のごとく鋭い目」“Mrs. Freeman's beady steel-pointed eye” (275) に当惑する。この鋭い目が、「彼女のうわべを貫いて、奥深くにある秘密の事実を暴いている」“...had penetrated far enough behind her face to reach some secret fact” (275) 気がするからだ。この使用人は、人が隠したがる秘密が好きなのだ。人に言えない病気や奇形、子供への暴行といった話を好む。ミセス・ホープウェルが話す、娘が狩猟中事故に遭い、義足になった経緯を、口を閉じ黙って聞き入る。また、ミセス・フリーマンは、母親がいないところでは、ジョイではなく、わざとハルガと呼ぶ。そう呼ばれると、ハルガは、まるで人の目に曝すことを拒み続けている秘密が侵害されたかのように赤くなり、顔をしかめる。普段は無表情を貫くハルガのあからさまな変化を、彼女は面白がっているかのようだ。彼女は、ハルガの恥の根源を見透かしているのだ。

ハルガの義足は、周囲に対する引け目の種となり、彼女に劣等感を植え付けた。その根深さは、

人並みの喜びを娘に求める母親が、人並みの肉体を持たない彼女に対し向ける、哀れみの眼差しによって助長された。ハルガは自身の肉体の欠如を、教養を身につけることで補い、不完全な自分を外界から守ってきた。そして、母親の自分に向ける不憫さに満ちた目を、知性と怒りでもって掻い潜ってきたのだ。オコナーは、義足をつけたハルガは体だけではなく、精神的にも不具であると言い、「彼女の魂には、木の足に相当する木でできた部分がある」“there is a wooden part of her soul that corresponds to her wooden leg”としている⁶。彼女の魂にある欠如を補う「木」の部分とは、信じるものは何も無いという己の信念しか信じないことと、虚無的な世界観である。ミセス・フリーマンもマンリー・ポインターも、単なる覗き見趣味から、他人の秘密を見たがる。しかし、ハルガに向けられた鋭利な視線は、彼女の表層を貫き、深層に隠された欠如部分を抉り出す鋭利さも併せ持っている。そして、ポインターの「鋼鉄のスパイクのような鋭い目」“his eyes like two steel spikes” (289) によって、ハルガの凝り固まった外面は打ち砕かれ、内面がむき出しにさらけ出し始める。

5. 開眼のきっかけ

ハルガの計画は、当初順調に進んでいた。彼女の誘惑に、純粹無垢な青年はうまく乗ってきたように思えた。また、彼女の発言に対する青年の反応が、思惑通りであることに、彼女は次第に得意になり始める。彼女が「私は神を信じていない」と言えば、彼は驚きで言葉も出ない。そして、「それなら、あんたは救われていないんだね？」と聞いてくる。この問いも、いかにも無垢な人間が聞きそうなものだったので、彼女は思わず笑顔を見せる。彼の無邪気な言葉に導かれる問答は、不機嫌な面持ちのハルガの顔にも、微笑みを浮かべさせる力があつた。彼女の無骨な口調も、子供をやさしく諭す母親のような、温かみを帯びてきた。素直な愛情表現を執拗に求める青年は、自分の誘惑に屈し始めているのだと、快い心持になる。そして、青年に眼鏡を外されたために、周りの風景をぼんやりと夢心地に眺める。もともと「よく注意して周囲を見ることがなかった」ため、ハルガは眼鏡をしていないことにも気がつかない。景色の見え方がいつもと違うことも気にならない⁷。このように、彼女の青年を啓蒙するという目的は、意外と早く達成されたかにみえた。

しかし、二人の立場は次第に逆転する。青年と会ってから緩み始めていたハルガの頑なな心が、瞬間的に動きを止めた。青年は、彼女の義足を見たいと懇願してきたのだ。それは、動物的欲求のままに発せられた言葉であつた。彼女は、この要求を頑固に拒否する。しかし、義足を見たがる青年の理由は、彼女の知性で武装した心に強く訴えかけた。彼は、彼女を貫き通すような目で長いこと見つめ、「それ（義足）があるからこそ、あんたは他の人と違って特別なのだから」“Because it's what makes you different. You ain't like anybody else.” (288) と言う。この言葉と執拗な眼差しに、彼女はこれまでに経験したことの無い快い感覚を体験する。

ハルガは座ったまま青年を見つめ返した。顔にも、凍るような丸く青い目にも、動揺した様子はない。だが、実際には心臓が止まってしまう、頭が心臓のかわりに血を送り出しているような気分だった。彼女は決心をした。生まれて初めて、真の無垢なる存在と向き合うのだ。この青年は、知恵を遥かに超え

たところから生じる本能で、彼女の真実に触れた。…相手に完全に服従するかのようだった。自分の命をいったん失い、奇跡のように、それを青年の中にふたたび見出すようだった。

She sat staring at him. There was nothing about her face or her round freezing-blue eyes to indicate that this had moved her; but she felt as if her heart had stopped and left her mind to pump her blood. She decided that for the first time in her life she was face to face with real innocence. This boy, with an instinct that came from beyond wisdom, had touched the truth about her. ... it was like surrendering to him completely. It was like losing her own life and finding it again, miraculously, in his. (289)

ハルガが、人並みではないために苛まれてきた欠陥部分を、この純朴な青年は、彼女の優れた個性であると認め、ありのままの彼女を受け入れた。そして、青年は、知性ではない直観から生じる言葉と視線で、彼女の深層に秘めた真実に触れたのだ。彼女は、青年という真の無垢なる存在に、奇跡的に再生のきっかけを見出したかのように感じる。ハルガは、彼の要求すべてに従う。彼の前で、義足を見せ、それを足から外し、またつけてみせた。青年は尊敬をこめた表情で見たかと思うと、子供のように無邪気にうれしそうな顔で、彼女の動作を見る。その様子に、ハルガは、この青年と駆け落ちし、毎日彼に義足の取り外しをしてもらう姿を心地良さに浸りながら想像した。ハルガは、青年の前に、眼鏡と体の不具を補う義足を外した、自然な姿を曝け出した。そして、彼の鋭利な眼差しは、彼女の魂の「木の部分」をそのままの状態で抉り出した。この露わになる経験により、「この世に見るべきものは何も無い」と精神的盲目状態にあったハルガの目は開き、再生のきっかけを見たのではないだろうか。これまでに無かった新たな感覚と眼差しで、ハルガは青年と向き合うのだ。それは、「自分の命をいったん失い、奇跡のように、」再び生まれるかのような心境へと変化させた。

しかし、事は劇的に急転する。青年は態度を急変させる。義足と眼鏡を取り上げ、ハルガを身動きできない状態のまま放置したのだ。そして、彼が聖書を入れて売り歩いているはずのカバンを開けると、そこには猥褻な絵のランプやウイスキーや避妊具が入っていた。ハルガは、彼のあまりにも衝撃的な言動に、頭はうまく回転せず、催眠術にかかったように声も出ない。やっと出た声で、「あなたはただの田舎の善人じゃないの？あなたは立派なクリスチャンなんでしょ？」と、相手の情けに乞うような口調で問いかけた。このとき、彼女は悟る。この男は、「田舎の善人」の仮面を被った悪人なのだ。義眼や義足など欲しいものを手に入れるため、偽名を使い、「善人」というクリシェを利用する男に、自分は最初から騙されていたのだと知る。義足を奪い、納屋から逃げ出し、遠くに走っていく青年の姿を、ハルガは打ちひしがれた表情を浮かべながら見つめる。

おわりに

本作品の最後の場面は、逃げていく青年を呆然と見つめるハルガの描写から、畑で玉ねぎを掘っているミセス・ホープウェルとミセス・フリーマンの描写へと移る。彼女たちは逃げていく青年の姿を遠くから見る。ミセス・ホープウェルは、その姿を「横目で見ながら」"squinting" (291),

いつもの調子で「彼は本当に無邪気ね。でも、私たちみんながあんなに無邪気だったら、世の中はずっとうまくいくはず」“He was so simple. ...but I guess the world would be better off if we were all simple” (291) と言う。次いで、ミセス・フリーマンは丘の向こうに消えていく青年をいったん「凝視」“gaze” (291) する。それから、掘っている玉ねぎに注意を戻し、「それほど無邪気でない人もいますよ。私はそんなに無邪気ではないわ」“Some can't be that simple... I know I never could.” (291) とつぶやく。この二人の眼差しと言葉の対比、とくにミセス・フリーマンの最後の言葉は、ハルガの神秘的な体験を目撃した読者には、含蓄をもって受け入れられるであろう。

ハルガは、単純な「田舎の善人」である聖書売りの青年に恥をかかせ、すべてをさらけ出した上で人生の真の意味を教え導くことを目論んでいた。だが、意外なことに、青年の「鋼鉄のスパイクのような」目や無垢な言葉は、彼女が頑なに覆い隠したがる欠如を衝いた。彼女は「真の無垢なる存在」と正面から向き合い、「完全に彼に屈服するかのよう」な心持になる。彼女は、空虚な世界観から抜け出し、新たな人生を生きるきっかけとなる瞬間を自身の目で見たように感じるのだ。ところが、物語の最後で、恥をかかせられ、内面をさらけ出し、放り出されたのはハルガの方だった。

この青年の外見や所作から、ハルガは、彼が無垢なる「田舎の善人」であると見なしていた。彼女の人を見抜く力こそ、鈍く、単純なものだったのだと思い知らされたのだ。並外れた優越感完璧に崩壊させられた。同時に、今まで木部として眠っていた魂の深奥が揺さぶられる感覚も味わされたのである。これをきっかけとして、傲慢なハルガが、再生のきっかけを掴み、これから人生をいかに歩むのか、オコナーは他の作品同様、言及していない。

オコナーは、カトリック作家の視点から、人間の内面の複雑さを描いている。しかし、同時に、悪がきっかけとなって、再生の神秘が始動する可能性も存在する。その瞬間は、言葉や行為を発する側の意図とは無関係に生じることを示唆しているのだ。

注

1. 引用の全文は以下の通りである。

「目は、最終的には全人格と収められる限りの世界を巻き込む器官である。モンシニョール・ガリアーニは、目は心臓に根を持つと書かれている。いずれにせよ、カトリック教徒にとって、目の根ははるか深く神秘の深みに伸びるものだ。この神秘について、現代世界は意見が分裂している。神秘を取り除こうとするものがある一方で、宗教よりもあまり個人に直接多くを要求しない規律に、それを再発見しようとするものがある。」(拙訳)

“...the eye, an organ which eventually involves the whole personality and as much of the world as can be got into it. Msgr. Roman Guardini has written that the roots of the eye are in the heart. In any case, for the Catholic they stretch far and away into those depth of mystery which the modern world is divided about —part of it trying to eliminate mystery while another part tries to rediscover it in disciplines less personally demanding than religion.” (“The Church and the Fiction Writer” *Mystery and Manners*. p.144-145.)

カトリックの特徴のひとつに、ヴィジュアルを重視する点が挙げられる。よって、カトリック作家であるオコナーの作品の視覚に焦点を絞って考察することは、彼女の作品研究において価値あるものと言えよう。

2. Flannery O'Connor, “Good Country People” *The Complete Stories*. (London: Faber and Faber, 1990)

以後、このテキストからの引用はページ数のみを表記する。また、日本語訳は拙訳である。

3. オコナーは1951年に26歳で狼瘡を発病し、ジョージア州ミレッジヴィル郊外のアンダルシアにある農園で、母親と二人で暮らし始めた。父親はすでに同じ病気で死去していた。本作品を執筆した年、足に障害が現れはじめ、彼女はアルミの松葉杖を使うようになった。自身の生活状況に着想を得て、主人公「ハルガ」を造形したと推測される。『フラナリー・オコナー全短編下巻』（横山貞子訳 筑摩書房、2003年）掲載の年譜参照。
4. 別の短編「善人はなかなかいない」“A Good Man Is Hard to Find”（1953）では、“hopewell”という言葉は、墓地の名前として使われている。主人公Grandmotherを殺す犯人The Misfitの父親が埋葬されている場所が、“the Mount Hopewell Baptist churchyard”である（イタリック筆者）。これは佐々木みよ子先生の指摘であるが、楽観論の甘さがオコナーの諷刺の対象になることは明白である。
5. また、ミセス・ホープウェルは自ら経営する農園に“The Cedars”「ヒマラヤ杉」（277）と名づけている。Hendinは、この名は「力、繁栄、長寿を象徴する聖書の木」“the scriptural tree symbolizing power, prosperity, and longevity”であり、彼女はこの名に「自己像」“self-image”を投影していると指摘している。注3でも挙げたように、人名や地名に、その人物やその土地の人々の楽観的な性質を映し出させるという技法は、オコナー作品の特徴である。Josephine Hendin, *The World of Flannery O'Connor*. (Bloomington; Indiana UP, 1970) p.73.
6. Flannery O'Connor, “Writing Short Stories” *Mystery and Manners*. (New York; The Noon Press. 1999) p.99.
7. オコナーの初出版作品『賢い血』（1952）の主人公 Hazel Motes は、母親の形見の眼鏡を持ち歩く。ハルガとは逆に、彼は視力が良いにもかかわらず、しばしば眼鏡をかける。この眼鏡をかけ、ぼんやりとした目で聖書を読み、鏡を覗き込む。彼は、輪郭のぼやけた自分の顔を見つめながら、「眼鏡は彼自身の裸眼の中に表れようとする何か不誠実なたくらみを隠しているかのようだ」“as if they (the glasses) were hiding some dishonest plan that would show in his naked eyes.”と思う。彼は、彼自身のなかにあるキリストの影を振り払おうとあがくが、最終的にはこの影と対峙する。眼鏡は、影から逃げようとする彼の「不誠実」さから彼自身を遠ざけているかのようだ。眼鏡の意味づけは異なるが、ハルガもヘイゼルも裸眼、すなわち自然な姿を曝すことで精神的に開眼するという点においては共通する。Flanner O'Connor, *Wise Blood* (New York; Farrar, Straus and Giroux. 1999) p.187.